ひらつからいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒151-0051
東京都渋谷区
千駄ケ谷
4-11-9-303
TEL・FAX
03-3401-6383

新春鼎談

「家」から元気をもらって

―上田・真田から新春のメッセージ―

らいてうの家オープンから三年、「家」を支えてきたのは手弁当で通う首都圏の会員だけでなく、主力は地元の会員や協力者のみなさんです。送迎の車を走らせ、受付けやイベント活動、キノコ汁やおにぎりづくりまで大奮闘。その思いを真田(花岡静枝)・上田(杉山洋子)両らいてうの会会長に聞きました。(真田町で。進行は米田会長)

森の中で子どもが生きいき

米田　あけましておめでとうございます。今年もよろしくと言いたいけれど、「家」の運営がたいへんなので気がひけます…。

花岡　たしかに人手確保はたいへんですが、結構楽しんでいます。全国の方に真田のことを知っていただけるし、いろいろなお話を聞くと勉強になるし、ピクニック気分にもなれますよ。

杉山　上田でも「あずまや高原」なんて知らない人が多かったけれど、「家」ができてから自分たちにとっても「癒しのひろば」だという実感が出てきましたね。特に子どもが喜んでいます。秋のイベントで、ふだんは人と話すのが苦手でお母さんが心配していた子が、みんなにキノコ汁を配ったりして大活躍していたでしょう。森の中で自然に自分らしくなれるのかなあ。

花岡　七月に薬草園で子ども祭りをやったときも感じましたね。それに、若いお母さん方にらいてうさんを知っていただく機会にもなるし。

米田　それってらいてうさんにぴったり！彼女は「子どもは自然の詩人」といって田舎暮らしをしたのです。「らいてうの子育て」の実践ですね。今年も上田市の「わがまち魅力アップ」事業助成に応募してバスをチャーター、お年寄りや車のない方も気軽にこられるようにしたい。

花岡　『家』の建設寄付をしてくださった方でまだ来ていない人も多いのでぜひやりましょう。

杉山　そうなるとお昼も要るから「薬膳弁当」でもつくったら？薬草園も活用しなきゃ。

「やってみなくちゃ」の精神で

米田　こんなふうに人をひきつけるのは、やはり「らいてう」と「森」の魅力ですよねえ。

(ここで「獏」の一人小林典子さんに電話)

小林　じつは途中で木が足りなくなって泣きそうだったのよ。中央設計の永橋さんに励まされてね。でも完成したら「よくやった」とほめられて「都市景観賞」までいただき、第三木材や宮下組にも感謝しています。どこも赤字？というウワサですがお金に替えられない経験でした。

米田　らいてうの会がなぜ木を植えるの？と不思議がられたこともあるけれど、正解でしたね。

杉山　らいてうさんは、思ったことはかならず実行、「やってみなくちゃわからない」というタイプだったのね。私たちもそうらしい(笑)。

花岡　私も突っ走るところが似てる？(笑)。みなさん泊りがけで、らいてうさんがしたように畑づくりや野草観察などしたら楽しいと思う。

「楽しくてためになる」らいてうの家に

米田　今年は薬草園や菅平も含めて地域の方や別荘の方とも話し合い、ここを元気の出る「癒しのひろば」に育てる一歩にしたいですね。

杉山　それからね、らいてうさんはエレン・ケイとかいっぱい外国の本も読んで、でも知識だけじゃなくて自分で納得して行動したでしょう。もっとそこを学びたいですね。

米田　賛成！クロポトキンやカントって難しそうだけど、生活感覚で読むとよくわかるの。平和の問題もそうね。活動も勉強もしましょう。

花岡　毎日忙しいけれど、「家」から元気をもらい、みんなが幸せになれるようにがんばりたい。

一同　CMではありませんが、「楽しくてためになる」らいてうの会員になって「家」にきてね！

らいてうと博史
―愛と平和の50年
築添正生さん（令孫）のお話
滋賀県・琵琶湖畔にて開催

昨年11月15日、「錦秋の近江路でらいてうを語る会」を開きました。この催しは滋賀県大津在住の、らいてうさんのお孫さん築添正生さんに、らいてうさん、とりわけ博史さんについてお話をうかがいたいと、かねて「らいてうの家」館長の米田さんが、築添さんにお願いして実現しました。

滋賀県母親大会連絡会が共催してくださり、琵琶湖畔の「ピアザ淡海」という素敵な県民交流施設の予約や、当日の設営など全面協力をしていただきました。

上田からは、15人の方々が、「築添さんのお話と源氏物語千年紀」を結ぶ「大津ツアー」を組んでの参加。前日は源氏講座でおなじみの宮島満里子さんを講師に、京都で紫式部ゆかりの史跡見学、翌日は会場近くの石山寺で紅葉を満喫、ドレスアップをして「ピアザ」に見えた方、滋賀県からも多くの方が参加され、80人の席は埋まりました。会場には「家」から運んだ写真パネルの展示、築添さん自作の「指環」も披露されました。

すらっとした上背の築添さんはシャイな笑みをたたえて、開口一番

「つばめの孫です・・・」

ちょっと緊張ぎみだった会場は、一瞬にして和やかな笑いに包まれました。（もちろん、みなさん意味はわかってのことですよね？）

「どっちかというと博史は『情けない男』というイメージが強かったようですが、なかにはそうではない見方もありました」

と、築添さんは訥々といくつかの例を挙げられました。

「たとえば、獅子文六さんは〝奥村君は大正の流行語・若いツバメの本尊であって、多少の軽蔑心を持って接したが、なかなか品のいい青年で、彼が好きになった〟

また、長谷川時雨さんは〝あなた（らいてうのこと）ほどの方が妻におもねり、機嫌ばかり取っているような男を伴侶として選びましょうか。見せ掛けだけでしか標準を定め得ない、世の中の軽薄さを思わされます〟という文章があり、らいてうには冷たい時代にこういう方もいらっしゃいました」

つづけて、築添さんは祖父、祖母の思い出を淡々と、語られました。

「祖父のアトリエは外国のものがいっぱいあって、それを見るだけで面白かった。ものごころついたころから、ぼくは漠然と絵描きになろうと思っていたのですが、祖父の影響で、立派とか、有名とかでなく、祖父のようにのんきに好きな絵を描いて暮らしていけたらいいな・・・と思ったのです」

「博史の書いたものを読むと、妻のらいてうに指輪でも買ってやろうと思っても気に入ったものがないので、自分で作ろうと、友人に職人さんを紹介してもらい、店に通って覚えたらしいです」

などなど、在りし日の平塚家の様子をたっぷり、そのゆるやかなお話しぶりから、まさに築添さんはらいてう、博史の生きかた、暮らし方を継いだ方だと、さらにらいてう一家が身近になりました。こころ豊かになった一日でした。

会に先立ち前夜、食事をしながら、滋賀、京都、大阪、長野、東京の参加者で友好を深めました。

（築添さんのお話は紀要二号に掲載予定です）

上田から「大津ツアー」を組んで参加されたみなさん

森のめぐみ講座

地球誕生、自然との共生学び
鮮やかな紅葉を満喫
「きのこ鍋」に大満足でした

2008年最後の森の講座は、紅葉の眩い高原で、自然との共生を学び感じ味わう充実した旅となりました。10月18日、菅平高原にある筑波大学の実験農場で、徳増征二教授から「自然との共生～植物、動物、菌類」について分かりやすく興味深い講義を受けました。地球誕生の46億年前にさかのぼるところからのお話。2名の飛び入り参加者も一緒に、人間のいのちの存在が実に多様ないのちとの連環の中にあることを学ぶことができました。講義の後、実験農場の中を案内していただき、ふわふわと足に心地よい林の小道をたどりながら、林に生きるいのちのありようを考えることができ、キノコたちも私たちを歓迎してくれました。

翌日は、菅平高原の紅葉の林をウォーキング、赤や黄色に彩られたゆるやかな小道をたどりながら森の自然について学び、思いがけずに現れた渓流の美しさ心地よさに心を奪われ、来年は花の季節にとの声が。その後は、長野県薬草園に移動しての昼食。遠く滋賀県からのお客様も交えて、地元の山で採れたきのこ鍋、地元野菜のてんぷら、漬物、煮物などで秋の味を存分に味わい、無農薬の大根、アケビの実などのお土産もいただいて、満ち足りた旅となりました。

この一年、地元の食材を味わわせてくださった真田、上田のみなさんに感謝でいっぱいです。そして、植樹、笹刈と雨続きだった今年の森の講座の最後に素晴らしい晴天に恵まれたことにも。はじめてらいてうの家を訪れた参加者のみなさんには、らいてうの家の心地よさをたっぷりと味わっていただくこともできました。

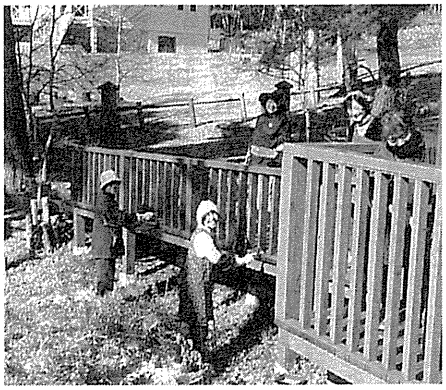
菅平高原の紅葉を満喫しました（上）
きのこ鍋作りに大奮闘の地元のみなさん（下）

＊森の講座番外編……2月22日(日)～23日(月)「スノーシューで冬の森を楽しむ旅」

今年もぜひひとの強い要望で企画しました。あずまや高原ホテルに泊まって雪のらいてうの家も訪ねながら。

参加希望の方は、らいてうの会に1月20日(火)までにお申し込みください。

「らいてうの家」冬ごもりを前に大掃除



11月3日今年度の開館は無事終了、4日、5日に大掃除をしました。標高1500mのあずまや高原はすでに冬、すがすがしい冷気の中「家じまい」の作業です。床は石鹸で汚れを落としながら水拭きし、蜜蝋で磨きます。手すりや玄関のアプローチはペンキ（自然にやさしい製品）塗りです（写真）。温もりのある木の「家」は木目や節の美しさとしっとり感、つやを取り戻して冬ごもりに入りました。上田、真田、東京からの延べ30人余りの会員のみなさんのご協力ありがとうございました。

掃除終了後は地元のみなさん持ちよりのおいしい昼食をいただき、一年間の反省会も。盛りだくさんだった今年のイベント、来年度のオープン予定やイベントの希望なども出され、08年最後の行事は無事終了。春のオープンをご期待下さい。

追悼　山田よし恵さんを偲ぶ

2008年11月8日、平塚らいてうの記録映画を上映する会副会長・山田よし恵さんが亡くなった。日に日に寂寥感、喪失感が深まっている。

1991年、日本女子大学の青木生子学長（当時）が同窓会桜楓会へ「平塚らいてうの復権」を申し入れたことを受け、9月、「日本女子大学平塚らいてう研究会」を結成、98年4月、櫛田ふき、小林登美枝両氏の意向を受けた高野悦子さんら有志で、らいてうの映画づくりを協議、翌年2月、「平塚らいてうの記録映画をつくる会」が発足。映画づくりがはじまった。資金集め、催し物の開催、映画の完成、上映活動、「上映する会」への改組、らいてうの家と平塚らいてう賞制定基金として日本女子大学への寄付……今日に至っている。

はじめて訪問された「らいてうの家」。和室でくつろぐ山田よし恵さん（左から2人目）
08年9月17日

よし恵さんはいつも会の中心であり、その人を包み込む笑顔で、会をまとめていた。会議での的確な示唆、企画力、ぶれない発言に私はよし恵さんのしなやかな勁さを感じていた。そして会を休まない勤勉さ。00年の発病後も、辛いといわれる抗がん剤治療中も、その姿勢は変わらなかった。闘病を人に感じさせなかった。

9月17日、研究会では上田の「らいてうの家」見学会を行ない、よし恵さんも参加、「きてよかった」、丸窓の傍らで明るい笑顔を見せていた。通夜の席で、その写真を友人が山田洋次監督に差し上げたが、監督は「覚悟して行ったんですね、きっと」とぽつんと言われた。

03年12月、母校でイラク派兵反対の平和集会がひらかれ、後藤祥子学長が挨拶されたとき、その勇気を声に出して讃えたのが、よし恵さんだった。よし恵さんが求めていたものは、女性の自立であり、世界平和であった。そしてそれは、まさにらいてうが希求しつづけた理念であった。

11月13日、「上映する会」では、「山田洋次監督のお話と『母べえ』の上映会」を開催した。前日、告別式を終えたばかりの監督は、「必ず行ってね、がよし恵の遺言でした」と語り始められた。平和への思いを映像で伝え続けていく、というメッセージであった。（ゲストの吉永小百合さんも、同じ思いを語られた）。

よし恵さんへの、何よりのオマージュであった。

日本女子大学平塚らいてう研究会・斉藤　令子

訃報　08年春、らいてうの色紙「無限創生」を寄贈してくださった塚本澄子さんが、昨年11月9日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。この色紙は、塚本さんたちのグループが1970年に雑誌を発刊するに際し、らいてうに寄稿を依頼したところ、らいてうが入院直前に書いて贈られたものです。「家」の和室に収まっています。

［事務局日誌］

10月1日　事務局会議
10月9日　第3回理事会開催
10月18～19日　第3回森のめぐみ講座「講演と菅平の自然観察・きのこ鍋交流会」
11月4日　「らいてうの家」閉館　大掃除
11月5日　大掃除　午後反省会
11月12日　山田よし恵さん（記録映画を上映する会副会長）の告別式に参列
11月13日　記録映画を上映する会主催　山田洋次監督のお話と映画「母べえ」上映会・日本女子大学成瀬記念講堂
11月15日　近江路で「らいてうと博史」を語るつどい・築添正生さん（らいてうのお孫さん）のお話
11月15～16日　中西悟堂生誕113年の集い、金沢大会・金沢ふるさと偉人館
11月19日　遺品梱包運搬　「家」の水抜き
11月27日　第3回常任理事会
12月8～9日　小林登美枝さん資料の整理作業